

新しい笠間焼の方向性を探るための「人にやさしい器」の開発

望月 聡美* 佐藤 茂* 鷲野谷 昇** 佐藤 三枝***

1. はじめに

ひとにやさしいうつわ開発研究会(以下研究会と略す, 写真1, 平成21年5月発足)では, ユニバーサルデザイン食器とオーダーメイド食器の制作に取り組み, 身体障害や加齢による身体機能低下に関らず, その人に合った使いやすい器(人にやさしい器)の開発を行っている¹⁾。

本年度は, 共同研究により, 障害者施設などユニバーサルデザインから新しい笠間焼の方向性を示唆した。



写真1 研究会の様子

2. 目的

「人にやさしい器」の開発のため, 障害者施設「愛正園」(高萩市, 以下愛正園と略す)の協力を得て, 以下を実施した。

①障害者福祉施設でのモニタリング結果の考察を基にした商品開発

平成20年度に行った愛正園でのモニタリング²⁾を考察し, 制作ノウハウの蓄積を目的にした『うつわカルテ』を制作・提案する。うつわカルテとは, 器の利用者の症状とうつわの形状の対応表のことである。主に当所が担当した。

②受注システムの検討

製作工程の短縮化, 遠距離からの注文への対応を可能とする受注システムを検討する。これに際しては, 愛正園で開催される月に一度の『うつわの日』のための開発とした。主に研究会が担当した。

3. 研究内容

3.1 愛正園でのモニタリング結果の考察を基にした商品開発

3.1.1 モニタリング結果の考察

愛正園は, 障害程度区分が平均5.8とかなり重度の入居者を抱える施設である。昨年度, 研究会の開発品を利用したところ, 非常に症状が改善・安定したため, 継続して開発するに至った。なお, 試作品の製作は研究会が担当した。

対象者: 愛正園入居者5名

対象商品: モニター商品23点(写真2)

(皿8・小鉢5・コップ10点)

実施期間: 商品1点につき約1週間

(全体で約3ヶ月)

実施方法: 介助者による聞き取り

設問: 重さ・サイズ・使いやすさについての3段階評価と職員の意見, 利用者の意見



写真2 モニタリング対象商品例

3.1.2 デザイン案製作

人にやさしい器のデザイン案製作のため, 利用者の基本情報(図1)を設定した。

うつわカルテ(基本情報)	
No.	001
作成日	平成21年〇月〇日
氏名	〇〇さん
所属	障害者支援施設愛正園
年齢	〇歳
所在地	茨城県高萩市下手編
主な症状	脳性麻痺による右半身でし、胸部マヒも少し発症。 マヒによる手の握るえり、踵下力もかなりあるものの、姿勢が右方向へ傾ため 足裏神経痛等の確認がある。①マヒによる握力不足 ②脳性麻痺による言語障害があるため、口の中に食物を入れたまま噛み潰れないことがある。 ③食事の時間がかかることがある。 ④SITの指示にて、マドラー使用
基本情報	項目 平成21年現在
食形態	経口/経管 経口
	主食 お粥
摂取状況及び介護状況	副食 ベーブ
	水分 水
	食器 箸・食卓皿
	食具 大スプーン
摂食状況	(滑)止め トレー
	食事動作 半介助
	補助用ツール 箸
	姿勢 右側へ傾
	咀嚼障害 困難
	嚥下障害 困難
その他	〇
医師	①食べ始めの咀嚼力も強いが、後半は噛み作業も止まり溜め込んでしまう。 ②介助していても声かけしないと溜めてしまう。 ③特に噛み潰さず飲み込まない。
言語聴覚士(ST)	マドラー使用指導あり。現状にて咀嚼嚥下困難なし。
歯科	PCR 67.1%
生活支援員	
生活ハビリ	
職員	

図1 利用者の基本情報(うつわカルテ1)

3.1.3 試作品の再評価

人にやさしい器の試作品の再評価のため, うつわ情報(通常利用食器と本人専用食器)と摂食状況についての記録(図2)を行った。

3.1.4 症状と形状との対応表(カルテ)の提案

利用者の症状とうつわの形状の対応表『うつわカルテ』として, 器の解決案(図3)を提案した。

3.2 受注システムの検討

3.2.1 試作品の製作(皿, 小皿, コップなど)

施設における陶器の普及を目的に, A.「全員共通の平皿」とB.「大中小のご飯茶碗」を制作し, 受注システムについて検討した。

対象者: 愛正園入居者7名

対象商品: モニター商品21点

(平皿5・ご飯茶碗16点)



写真8 人にやさしい器展の様子

3.2.4 アンケート調査の考察

1) 回答者の属性

性別分布…男性 34%，女性 59%，無回答 7%
 年齢分布…～10代 1%，20代 7%，30代 17%，
 40代 14%，50代 34%，60代 24%，
 70代～3%

2) 人にやさしい器に関する設問

設問：人にやさしい器を知っていたか
 はい 40%，いいえ 54%，無回答 6%

3) ユニバーサルデザイン・バリアフリーについての設問

- ・設問：ユニバーサルデザインを知っていたか
 はい 51%，いいえ 44%，無回答 5%
- ・設問：バリアフリーを知っていたか
 はい 75%，いいえ 25%

4. 結果

4.1 障害者福祉施設でのモニタリング結果の考察を基にした商品開発

人にやさしい器開発のためには、主に10項目（柄・色・形状・重さ・返し・深さ・幅・取っ手・収納・高台）のキーワードが抽出できた。

重さの検討結果では、笠間焼の短所としてよく挙げられる「重い」という特徴が、利用者と介助者にとって「安定する」という長所となった。

4.2 受注システムの検討

製作工程の短縮化、遠距離からの注文への対応のためには、立ち上り（返し）の深さ、スプーンやお箸などとの兼ね合いの考慮が必要であることが確認された。

4.2.1 立ち上り（返し）の役割

身体のマヒなどにより、細かい手の動きができない人は（写真9）、立ち上り（返し）が8～10mm必要となることが分かった。

4.2.2 兼ね合いの考慮

本開発品で、特に写真10が好評であり、立ち上りのある部分とない部分で、ご飯と麺類を使い分けができるという評価があった。

自立摂取が可能な人にとっては、目視で明確に認識できる形状が好ましいことが明らかとなった。



写真9 施設用食器(左)と開発品(右)の利用風景



写真10 立ち上がり部分のはっきりした平皿

5. 考察

本開発により、制作工程における発注者と制作者との情報の共有化を促進するうつわカルテを制作提案することができた。また、障害者施設で使用可能な器の形状についても検討し、開発の方向性を確認することができた。

今後、今回のモニタリングから得た知見を蓄積し、活用していくことで「ひとにやさしいものづくり」の更なる発展が期待される。

アンケートの結果より、人にやさしい器の認知向上が見られたが、今後も引き続き、ユニバーサルデザイン・バリアフリーの普及とともに人にやさしい器のPRを行っていく必要がある。

今後の課題としては以下の点が挙げられる。

- ①症状に対応した食器の形状の検討付けをより効率的に行うため、うつわカルテの充実を図る。
- ②人にやさしい器の品質向上のため、利用者の症状を更に掘り下げて再検討する。
- ③施設での使用を実現する為に、収納・洗浄などの問題を再検討する。
- ④人にやさしい器の普及の為、福祉機器関連企業など各種団体との連携を検討する。

謝辞

本研究を進めるにあたりご協力くださった、障害者施設「愛正園」松下博施設長、石川真由美栄養士をはじめ、職員の皆様、入居者の皆様に心から感謝いたします。

参考文献

- 1) 茨城県工業技術センター研究報告, 30号, P70～72
- 2) 茨城県工業技術センター研究報告, 37号, P67～68
- 3) ワークショップ人間生活工学 第1巻 人にやさしいものづくりのための方法論, 社団法人人間生活工学研究センター編